

○司会者（瀧川） 先ほど、第1部では無藤先生にいろいろお話をお聞きしましたけれども、続きまして、広告チラシにもありますように第2部に移らせていただこうと思っております。

第2部は3時25分から4時25分まで1時間です。無藤先生の前に北野先生に座っていただいておりますけれども、こちらのお2人の先生方に対談という形でさせていただこうと思っております。当初、無藤先生の講演だけ、もしくは質疑の会だけにしようかという案もあったんですけども、これは無藤先生からのリクエストで、ぜひ北野さんと対談したいということで実現いたしました。北野先生も物すごくお忙しい中、来ていただきまして、ありがとうございます。神戸大学の北野幸子先生です（拍手）。そして、先ほどお話しいただきました無藤先生です（拍手）。

私は最初の司会だけで、あとはお2人に任せようと思っておりますけれども、最初に北野先生から無藤先生のお話を聞いたり、今回、対談ということで御準備いただいたりということですので、幾つか質問とか、御意見というんでしょうか、感想とか、お考えを御紹介いただきながら無藤先生にお話を投げかけていただければと思っております。

では、早速ですけれども、北野先生、よろしく願いいたします。

○北野氏 神戸大学大学院の北野幸子です。ありがとうございます。

今日、大阪総合保育大学のキャンパスも見せていただきましたけれども、すばらしい環境で、大方美香学長の本当に心と、アイデアと、センスが満ち満ちたこの会場、初めてゆっくり見せていただいて。そして、何よりも、無藤先生と、私でいいんですかと何度も何度も美香先生には確認したんですけども、超若輩者ですし、2009年、2010年頃に国際学会の準備のときに、当たって砕けろと思って、ご連絡したら、会ってくださることになって、会っていただいた時が「初めまして！」の、教え子でもないし、心理学の研究者でもないし、発達心理学会にも入っていないし、そういう私なんですけど、出会ったときに、「これからの保育をどう思っているの？」とすごく優しく聞いてくださって、そして、そのときの話したことがベースで、弟子でもないし、心理学者でもない私と一緒に、『認定こども園の時代』という、まさにこれからの時代をどうするのかということと一緒に考えてくださって本を出させていただきました。そのとき、私はまだ39歳、40歳になる前で、すごい生意気だったと思うんです。今も生意気ですけど、本当に私から見たら、ずっと壇上で見ていた無藤先生が、初めて会ったときにじっくり話を聞いてくださって、一緒に未

来を描こう、共著者に入れてあげるよと言ってくださって、そして、『認定こども園の時代』という本を、ひかりのくにかから出させていただいたんです。私の宝物、財産になるスタートの本になりました。

このたび、『「愛と知の循環」としての保育』という御著書、無藤先生の御理論を読ませていただいて、基本的に私は18歳から保育学しか勉強していないので、保育学で大切にしてきたこと、大事にしつづけたことを、ちゃんと理論立てられて、そして、学問としてこういうふうに発してくださったんだなと思いました。

僭越な言い方ですけども、多分、保育の現場で愛があふれているということは実践現場にたくさん出かけていると分かるし、そして、子どもがおもしろを知りたい、何でだろうと感じ、子どもの好奇心や探究心や憧れが起点となって、いつも無藤先生は子ども姿ベースとおっしゃっていらっしゃいますが、そういうふうにこの本にも書いてあったと思います。これはある意味、私たちにとっては自明なことなんだけれども、まだ理論化されていない、言語化されていないことだったんじゃないかと思います。

子どもが物とか人とかに出会って、面白そう、何でだろうと知性が湧いてきて、そして、人が好きになったり、物が好きになったり、世界が好きになる。そこにある愛、無藤先生に何度もお聞きしているんですけど、ここでいう先生の愛というのは、ちょっと照れくさいけど、愛という言葉が使われたとおっしゃっていましたが、愛は広い愛で、ラブだけじゃなくて、フィランソロフィー（博愛）とか、さっきもお話ししていたのですが、慈しむということ。これがもしかしたら自分の知性の扉を開いていく、乳児期の生まれてから世界と出会って、世界を広げて探究して、そして、知性、そういうものの扉も開かれるし、社会性も開かれていく。そういうものだろうと思ったんです。

だから、そういうふうな意味では、現場にいれば、ある意味、当たり前だなと思えていたたくさんの事々が、しかし、今までの、恐らくフレーベルや倉橋とも違うなと私が思っている大きなところは、私もプラグマティストなんですけれど、いわゆるプラグマティズムの現実主義的なところ。行為とか、事実をもって何なのかということ判断するという、よりプラグマティズムの志向が入っている。恐らくそれは先生が極めて科学的な、さっきも科学の話、プラグマティズムと科学性の問題。これまで情緒的には愛とか、面白い、楽しい、不思議だなというような、あるいはセンス・オブ・ワンダーだと言われるようなものというのは、保育界では普通に言われ続けたことだけれども、それがもっと科学的に説明されたり、科学の分野としてしっかりと位置づけられた。

先ほど、ジョン・デューイの倉橋の影響という話をされていたじゃないですか。教え子も何人か来ているんで言いたいんですけど、神戸大学はジョン・デューイにすごい影響を受けています。ジョン・デューイと及川平治は交流がありましたし、及川平治は大正新教育運動のときの神戸大学附属幼稚園の園長と附属小学校の校長をしていた人なんです。神戸大学の幼稚園と小学校の真ん中のところには——ごめんなさいね、手前みそなことを言——及川平治記念館があるんですよ。及川平治記念館にはジョン・デューイの写真に「Dear Friend Eiji」と書いたものがありそれを、私たち、後生大事に持っている。そして、神戸大学附属図書館、どうぞ御利用ください。国立大ですので。そこに『Early Works』『Middle Works』『Later Works』というジョン・デューイの全集があります。

私の卒論はジョン・デューイの幼児教育論なんですけど、ジョン・デューイの著作の索引を見てキンダーガーデンと書いてあるものを全部読んで書いたのが私の卒論なんです。だから、ジョン・デューイにすごくシンパシーがあるというか、そういうふうにしたときに、観察、記述、モニタリング評価、こういった科学的なものも、ある意味、プラグマティズムの中で、私たちなりに情緒的な中に収めてきたかもしれないような、観察して、記述して、モニタリングして、可視化したり発信化する。ここは科学性の中で大事なところだと思います。科学性を追求するという意味では。

そういう意味では、そこら辺のこと、先生の『「愛と知の循環」としての保育』の理論の中での科学性、プラグマティズムの中での記述のこととか、モニタリングのこととか、評価のこと、可視化のこと、言語化のこと、この辺のことについて、私ばかりしゃべってはいけませんから、先生にお話を伺いたいと思います。

○無藤氏　私がこの本を書いたモチベーションが幾つかあるわけです。先ほど、その一つは話したんですけど、幾つかある中のもう一つは、保育学の実践の科学としての確立、というと偉そう過ぎますね。実践の科学としての在り方を一つ示したいというのがあったんです。余りここに書いていないのは長過ぎて割愛ということになっちゃったんですけど、それは相当前から意識しているんです。そういうふうに明確に書いていないかもしれませんが、この本の最終章で、研究履歴的なことを書きましたが、そこに書いています。

これは、歳を取ると振り返りたくなるという年寄り心理ですけど、同時に、保育学なら保育実践を核にすべきだろうと思ったわけなんです。それは30代くらいなんだけど、40代で本格的に考えたんですが、どうしていいか余りよく分からなかったわけですが、だんだん幾つかの研究その他を手がかりにして、少しずつ組み立ててきたわけです。別に保育学

というものを狭く定義してもしようがないので、保育学というか、その中にいろんなものがあるいいわけで、数値的実験的な分野としての心理学分野、生理学分野があるいいわけですね。

ですから、そういうものを参照すべきであることは明らかで、例えば、一時期、非認知能力などところからはやってというか広がって、その中心的な核は実行機能という脳のある部位、主に担うであろう、自己コントロール機能みたいなことですが、その研究がかなり広がって、今、非常に活発な領域だし、実行機能を伸ばす実践とは何かということもいろいろエビデンスを世界的に積み上げてきているので、それはそれで尊重すべきだと思うんです。でも、それは実践を中心に置くとすれば、それ以外のことも多くあるわけで、そこで保育実践が尽くされてはいないと思うわけです。

それはどういう立場のものでもそうだと思いますし、何でもいいんだけど、例えば、最近増えた言い方で、主体的な保育にしたいとか、子どもを主体的にする、子どもが主体的になる園でありたいとかいう人がいるじゃないですか。そう思う人ももっと多い。ここにいらっしゃる方の多くが思っているかもしれませんが、別に思うことはいいですが、僕風に言うと、さあ、旅をしよう。北のほうに行こう。あの北極星くらいのところに行こうねという感じに思えます。

北極星を目指すのはいいんですよ。いいんだけど、北極星を日本まあ大阪とかから目指すと、多分、日本海辺りにはまっちゃうし（笑声）、あっちというあの遠くのところで、行くからって真っすぐとりあえず歩き出したら、横断歩道じゃなくて自動車にぶつかって死んじゃうから、回り道をするじゃないですか。その手前が膨大なんです。北極星は遠いにしてもね。

だとすれば、園の保育は主体的でなきゃいけないとか、そんなスローガンでよっぱらわないで、とりあえず朝の時間の集まるときにどうすればいいのかなとか、今非常に具体的な例を出したのは、最近のことですが、朝集まったときに、最初に朝の会をやっている園があったんです。幼稚園ですけど、9時に集まって、最初に朝の会を20分くらいかな。それでいろんなことをしたり、今日の予定とか、これからみんながやりたい遊びとか決めたりという、割と面白いやり方だなと思うんですけど、そういうところで考え出すと、そういうのなしに子どもがいきなり遊んだほうがいいんじゃないかとか、当然そういう批判はあり得るわけです。じゃ、そうするのがいいのだろうかとか。でも、さっき話したように、子どもたちが集まって、いろいろ発表したり、そんなことを振り返ったりするのもい

いんじゃないかとなると、みんなが集まる場も必要だろうか。

その園では、朝の会で昨日の遊びを振り返っていますけど、昨日は遠くて、その日のうちがいいんじゃないのとか、いろんな考えがあるでしょう。そのときに、朝の会とか前に集まるとか全部やめて、子どもがそれぞれ選んで、給食までずっと遊ぶのが主体的なんじゃないですかとか、そういう考えもあると思いますよね。試しにやったらいいと思います。それに近いのは見たことがありますけれども、何かいろいろ抜けていないのかなというのが私の感想で、それは主体的であることに、主体でないことも必要だという意味ではなくて、例えば、みんなで集まって話し合ったりするということは、幼児期に育ってほしいことのひとつであって、主体的というか何というかどう呼ぶにしても、大事なんじゃないのとか、意見の交換をしていくというのは、大げさに言えば民主主義的なスタイルの始まりじゃないのとかなるじゃないですか。そうすると、迷いますよね。

私は今、皆さん方に正解を用意して与えたいわけじゃないので、別にどっちでもあり得ると思うんだけど、つまり、そのときに重要なのは、じゃ、うちは集会しませんとか、先生の紹介する〇〇幼稚園がすてきだから、必ず2時間、自由に遊んだ後は30分、クラスで集まることにしますとか、やったっていいんだけど、問題は、その後に、そこで子どもたちがどうなっていくかという姿があるわけです。

だから、今出てきた問題でいえば、プラグマティズム的という言い方になるとか、試行錯誤して、その様子を捉えて、それを詳しく記述し直して、できれば文章にするなり、写真なり、何か記しておいて、それを何人か先生で考えて、これでいけそうかなどうかな、もうちょっとこの辺は工夫したほうがよくないかなというふうにして直していくわけです。さっき、そういうみんなの時間の中で、福井の附属幼稚園で苦心して、うまくいっているところもあるし、なかなか難しいなというものもあると言ったと思うんですけど、本当に砂場遊びで盛り上がった後の、要するに、その時間は、それぞれにやっているから遊びはやらないんで、砂場遊びをやっている十数名は知っているけど、こっちで違う色水遊びしている子は知らないわけだから、今日の特に砂場遊びの盛り上がったというか、新しいことが起きたというか、そのことを知らせたいわけですが、言葉で言っても全然分かんないわけです。

今日の山をつくったとき、ちゃんと固めていて、見ていたら「ここは白い砂を混ぜると固くなるから、こういうふうにするの」とか子どもが言って、先生が左官屋のこてみたいなのを用意されているんです。それで、1メートルくらいの山をつくっているけ

ど、みたいなことは、砂場遊びをする10人か、もうちょっとくらいが知っているんだけど、ほかの子は知らないわけです。全員が同じようにできなくたっていいんだけど、せっかくの発見を知らせたいじゃないですか。だけど、今のように口で言っても「へえ」というだけで、そこでの子どもたちの発見とか面白さは伝わらないんですよ。

だけど、実物を持ってきて、さっき言ったダンスなんかも、「おおっ」という感じで、やっぱり共有するときの盛り上がりが欲しいじゃないですか。それをやって初めて子どもたちの文化になる。なっていくように考えるわけじゃないですか。

今のように考えていることが、まさに北野さんが言う流れだと思うんですよ。常に試行錯誤しながら、先生と子どもが一緒になって新しいものをつくっていくところ。そういうものは幼児教育として普通だと思うんだけど、難しく言えばプラグマティズムの発想かなと思うんですけどね。

○北野氏　ありがとうございます。

実践の科学としての保育、あるいは、そこに対しての理解をしっかりと社会にも広めていきたいなど。そのためには理論化して、そしゃくして、自分でも説明できるようになっておくことが大事だなと思っていて、その中のアイデアを、先生の御著書の中ではたくさん発信してくださっているなというふうに私は考えているわけです。

私は、やっぱり保育の実践の知がなかなか難しいところ、さっきの話なわけですよ。唯一無二の正解があるわけじゃなくて、状況も、子どもも常に変化しているし、そして、本当に一つだけの答えではないけれども、でも、よりよいものを求めていくような。そういう意味では、私たちのカリキュラムは小中高と違って、エマージェントカリキュラム、創発的なカリキュラム、子どもと相互作用でつくっていく。あるいは、環境を通じた教育とか、環境の再構成とか、子どもとの相互作用の中で環境を再構成していくとかが、私たちにとっては極めて当たり前の、いわゆる保育の実践の科学の特徴のところ。そのところが、しかし、なかなか他者に説明できていなかったり、難しいところがあるんじゃないかなと思うわけです。

その中で、私、一つ、保育の原理を説明するときに、自分の中でシンパシーのある理論の一つがシステム論で、ルーマンとかのシステム論と、もちろんプラグマティズムは相いれないところもありますけれども。プロセスを重視することとか、相互作用こそが物事をつくるんだというようなルーマン的な考え方みたいなものとそして、そこに実践があって、子どもがいるというリアリティーがあるプラグマティズムとの、接点のようなところ

で保育の理解をどうしていこうかと私自身はずっと探究してきたんですけれども、そこに対しての一つの答えを先生が出してくださって。私たちが、保育者の専門性について、どうやって説明できたり、言語化したり、独自の専門性の理論的なことをどういうふうに説明できるのかということも大切なことで、そういう意味では、先生が、やはり不確定要素が多い、偶然と偶然の重なりということで、ダブル・コンテンジェンシー、相互偶発性の中から新たなものをつくっていく。そういう保育者の専門性の独自なところが「愛と知の循環」としての理論の中で説明されていると思うんです。相互作用というのは、一つのキーワードだと思うし、先生も「カリスマというより、相互作用するハブとな」り (p. 380) とこの本にも書いていらっしやいましたけれど。相互作用は、システム論的にも、プラグマティズムにおいてもそうだと思うんですけど、保育の中の独自性、私たちの専門性の特徴だと。保育者の専門性、独自性をいうのであれば、そのところ、つまり、答えが一つじゃないし、変動していくし、調整して変えていっている生態的なものだということ。その深みについても先生に御指導をいただきたいし、私たちが人にそれをちゃんと説明できるような言語のヒントがここにはたくさんあるんですけど、そのことについても説明を加えていただき、教えていただけたらなと思います。お願いします。

○無藤氏　一つは、エマージェントとしきりに言うんだけど、エマージェントというのは新たに現れてくるという意味で、出現するとか、クリエーションの創造の創に、出発の発で創発という言い方をする場合も多いんだけど、エマージェントというのは徐々に表れてくると。

数日前の大阪のニュース、びゅんと、あんな急には出ないと思いますけど、もうちょっと徐々にやりますけど、というような感じのところですよ。それは、システム論的なものをちょっと持ち出すと、イメージ的に書くと、こういうもの(ホワイトボードに渦が上がっている図を描く)、こういう何かぐにゃぐにゃしながらも、何かここから生まれ出てくるよねという話であるわけで、さすがに渦を書かれてもよく分からないので、この中に幾つか要素がありまして、ここで相互作用、ここがいろいろ展開しながら何かが出現してくるよね。こういうことに着目しましょうという話です。

それは珍しいことのように見えるけど、さっきから示している紙コップなんですけど、たまたま上手くひっくり返りましたね。今、何げなくやったら、ひっくり返ったんですけど。これ、さっきもやろうとしているんだけど、なかなかやっぱり、たまにいくんですけどね。子どもにやると熱中します。こうなったら100点ねとか。

今のようなことがエマージェントなんだよね。要するに、設計したわけでは多分ないと思うよね。紙コップをつくった人が、ひっくり返してうまくいくということは考えていないわけですし、今、私も、そんなひっくり返してとは思ってもせずに、何となくやったらそうなっただけであるわけで、再現性がないですけど、本当に……（笑声）。

今のようなことは、一つは、よくあるということです。要するに、珍しいことではないので、しょっちゅういろいろなところで起きている。逆に言えば、あらゆることが前もって想定され、デザインされ、設計されているわけでもなくて、新しくそこから始まることはむしろ普通だということです。

それは、例えば、ここに段差がありますけど、子どもが走って、ここでぴょんぴょんぴょんぴょん跳びはねるかもしれない。ここは大学だから、そういう遊びは想定していないですね。ないけど、幼児が来れば、遊びの場に変えられますよね。机の上に乗ったりして怒られるかもしれないです。つまり、いろんな関わり方があるから、そこに新しいことが必ず起こると思って、そういうものには動く余地が思ったより大きいので、我々がそこをデザインし、計画している範囲、これは普通いう指導計画なんだけど、それをはるかに超えているいろんなことが起こるし、その中には、誰も思わないが、起きたことが偶然起こるけど、偶然起こると面白いと思えばもう一回何とかしたくなるじゃないですか。それで、こうやって、こんなのは当たり前ですけど、子どもにとって「ああっ」と思うわけです。

子どもたちにとって、映像のモニターは当たり前なんですけど、家庭にテレビがあるから。だけど、家庭のテレビでこういうことは起こらない（プロジェクターの前に手をかざすと影が生まれた）。びっくりするよね、こういう。あっちから映ると言われると当たり前には違いなんですけど。だから、私たちは大人として常識を持って生きていると、全ては当たり前なんですけど、その常識を少し外すと、世の中が思いもかけないというところちょっと言い過ぎだけど、「あれっ」ということがたくさん起きる。しょっちゅう、いつでも起きている。その中の多くはどうでもいいことなんだけど、時々大事なことも多分あるわけで、そういうところをどう拾い出すかということが重要です。

そのときに、循環と書いたのは、いろんなことが新しく起こるんだけど、それが、例えば、ほかのことでも同じようなことが起こると、そこで起きたこととつながり合って見える、共鳴していくと、「あっ、そうか」となるんです。ここでこういうふうに見えるんだけど、これは気づくと、プロジェクターですけど、ああいうふうには影ができるんだ。というのは、園で、こういうものを持ってやっているところもある。

そういうのは、太陽の下で影でできるよねというのが、最近の子どもは余り分かっていないことが多いですよ。夕方の光が余り分らないというか、保育園で夕方、冬、5時頃、1月くらいまで暗くなっているじゃないですか。だから、本当は夕方の影って分かって、私の子どもの頃だと影で遊んでいたんですけど、影踏みとか、今、ほぼないのは、どうしてかといえば簡単で、都会だと街灯がやたらあって、クリアな影がまずできないんで、目立たないからなんです。

例えば、朝、9時前くらいだと、朝日がこっちに差してきたとき、そういう光に見えるときもあるんです。そうすると、ここでの現象と、こっちの現象が合ってくる、つながるんです。夜じゃない、それほどロジカルにつながっているわけじゃない。「あっ、似てる」というか、共鳴するとか。そういうことが生まれて、このつながりとか、大きくなっていくような感じね。だから、こっちのさざ波と、こっちのさざ波が合わさって波が広がっていくような、そういうことを起こすと割と大事なことに進んでいくよねと思う。

そうだとすれば、そこで必要なことが2つあって、一つは、さっきから言っているように、ここにちょっとした思いつきか、偶然か分かんないけど、それを子どもが始めたときにうまく拾い上げる。「面白いね」。

もう一つは、子どもがつながりを感じるころの前に、先生のほうがつながりを把握しておいたほうがいいんです。そういう意味でいうと、そこら辺に、小学校風に言うと教材研究。もう少し広い意味だけど、紙コップの話でいうと、さっき言ったように上のここと下のこことで半径が違う円ですよ。これが固定された、一緒に動くから回転するわけですよ。そうすると、一回転、いずれもするんだけど、こっち側、小さいほうの円が描く円は小さくて、こちらは大きく広がりますね。だけど、同じ一周で動くよね。

こういう話をやると、途中で、「あれ？分かんない」という顔をみんなするんですよ（笑声）。こうなっているじゃないですか、一周の動きが。ここが中心ですよ。ここが中心に転がっているから、これがこういうふうになって、これは幅、これは回転がこうですよ。なんだけど、小さいほうの円はこれだけ進んで、大きいほうの円はこれだけ進むというふうになりますね。そうすると、角度のこういう動きが来ているでしょう。それは動きだから速度ですよ。こういうのを角速度というんです。

さて、こういう辺りで、皆さんにとっての悪夢のような話になる。三角関数とか、微分とか、積分とかなの。これ、ちゃんとすると微分方程式になるんですけど、聞いたことがないかもしれませんが、高等数Ⅲまでやると分かるんですけど、それを今、理解しろと言

っているんじゃないくて、こういう話をしても余り面白がってくれないんですけど、これがこれだけ動いたのに、この辺はこの動きで、こっち側はこんなに動くよねって……不思議と思わないんだよな、余りな（笑声）。

この原理がたくさん使われていて、例えば、今違うんだけど、車の変速機、大きさの違う歯車を組み合わせるとすぐ分かりますけど、こういうギアとか、いろんなところに使われる機械の最も中心原理なんですけど、そういう理屈をちゃんと知っている人じゃないんだけど、この回転は面白いよねということね。これ、理屈はよく知らないけど、数学的に割と大事だよなとか、これを回すと、ここにインクをつけることが可能なら、こうやってやると、きれいな正円になるんです。まん丸いんですけど、「あっ、格好いいな」。もちろん、こうやってここに付けると、きれいな丸になります。ここにインクをつけてこうやると判こみたいになりますね。小さいやつでね。

そういう一定の現象はつながっているわけです。数学的原理です。そういう意味でつながっているというふうに十分数学的な意味での把握をしていなくても、何かつながっているっぽいねと。幼児は別にぼいでもいいので、似た丸が、でっかくなったり、小っちゃくなったりするということで、それはいろんなところでできるので、例えば、こういう懐中電灯を持ってきて、照らし出すんで、絞ると小さい丸になって、広げると大きい丸ができるでしょう。いろんなところにあるわけ。

そうすると、例えば、大きさというのほどこで理解するかというと、大と小の比較なんだけど、その次に、小が大になる、大が小になる。大小の連続性の経験が割と重要で、粘土を足していくと大きくなりますよね。そういう経験もそうだし、今言ったような連続的に変化していくとか、もっと普通にあるのは長さで、短いものを長くして、ひもとか、植物の栽培。

去年行った園では、たまたまへちまを栽培していて、そのツルが伸びて、子どもが巻尺で一生懸命測って、こうやってもまだ先だから、椅子を持ってきて、こうやって、こんなふうにやって、かなりいいかげんではあるんだけど、2メートルか何かだと。ただ、植物の栽培は、植物の命の栽培という面と同時に、伸びるということです。線が伸びる経験、数学的経験なんですね。というふうに見るじゃない。

そういう目を持つと、周りが、この環境が、私たちはいろんな眼鏡を持っていて、見方・考え方は小中学校でやる、そういうものなんだけど、そういう幾何学的なものを見る目を鍛えていくと、この四角の中に4つの入り口があって、それぞれが長方形で、長方形

が2つ組み——ドアね。正方形になっているとか、そういう形として浮き上がってくるわけね。

幼児が図形を学ぶというときに、よくあるのは、丸とか三角の区別みたいなドリルがあるでしょう。つままないわけです。そうじゃなくて、丸や三角や四角というのはこの世界に満ちあふれている。特に人工物は丸や三角、四角でできているから、平らだなと思うものが四角なんだ。丸というのがこんなところに隠れている。丸みを帯びているだけじゃなくて、ここにインクをやってこうやったら本当に丸だ。そういう認識には感動があるんです。そこはまさに愛と知が一体だという感じなんです。

○北野氏　まさしく大切なことだと思いました。やっぱり知性というのは学ばされるものじゃなくて、発見して楽しいし、好きになっていきながら深まっていく。それこそが保育の実践の知の専門性だし、それにおいて先生が、保育者の大事な役割があると言ってくださったこと、これは本当にそうだと思います。

一つは、やっぱり見落とさない、見過ごさない。場面がいっぱいあっても、視点がないと見つけられないですよ。流れていってしまう。保育の実践は現象だから、見る目がなくてキャッチしないと流れて消える。あったのか、なかったかが分からない。そういう意味では、認めるとか、見つけるとか、見過ごさないと先生が一つ目に言ってくださったこと。

この見過ごさないというのもすごく大事だと思うんですよね。1、2、3年目くらいのキャリアの先生たちは、子どもたちが、予測しないことが起こったらドキっとするじゃないですか。でも、8年を超えてきたくらいから、「おお、そうくるか。もっと予測しないこと、やってみて」とか、「それ、それに使う？」とか、そういうところを一緒に楽しみながら、先生の中にも知性の信頼とか、発展していくことの楽しさ、愛と知性がまた循環して行って、先生の中でも、そういうものが循環していくということが保育の現場でたくさんある。保育者の大事にしたい役割の一つの見過ごさないこととか、予測と違うことを歓迎するような気持ちは大事だなと。

それから、つながりを感じる。もちろん水遊びをしている子どもが、さっき三角関数とかいろいろありましたけど、別に表面張力という言葉を知らなくても、葉っぱに水をつけて、おでこにぱんと貼るといふ、水でくっつくよねと知っているとか、ペットボトルのサイズが違ったら、ぷかぷか感が違って浮力が違うよねとか、表面張力とか浮力という言葉は後で習えばいいんだけど、そういう科学って本当に面白さにつながっているから、

それは科学だけじゃなくて、数理の問題もそうだし、もしかしたら言葉のこともそうだし、美学もそうだし、音楽的なこともそうだと思うんですが、そういう意味では、将来、高校の何年生で習う物理の〇〇——うちのお父さん、物理学者なんです。だから、さっきのお話とか、私はどっちかという大好きなんですけど、それが好きとか、嫌いじゃないとかじゃなくて、あらゆる科学につながっていて、その発見の出会いの最初の場に立ち会えるのが私たちだから、そういう意味で私たちは、ある意味、アレルギーを持たないで、好きとか苦手とか、理系得意じゃないとか、文章を読むのや書くのが嫌いとか、それぞれの個性は置いておいて、そこで楽しむ知性、それに対する愛、知に対する愛を持つということが保育の専門性としても極めて大切なことじゃないかなというふうに伺いました。

そうなってくると、私、先生の御著書を読んでいて、本当に広いと思うんです。美学、美しさに対してもそうだし、古典的な文化史とか、美術史とか、音、音楽、感性、感受性、そういったことも広く。そういう意味では、いろんな方面へのアンテナが張られていて、それを保育界は、先生という方がそういう方だけど、保育の私たちは、いろんな分野のいろんな、美術も、言葉、言語表現も、身体の動きも、ダンスも、こういうものをアンテナを張っていて引っ張り込んでいくというか、それが子どもたちに豊かな環境とか、子どもたちとも即座につながっていく。

そういう意味では保育の広さ、学際性とか美的なもの。科学だけじゃない、美的なものというところについても先生にお聞かせいただけたらなと。この本を読みながら、本当に広いと思ったんですね。そこがまた保育の魅力、面白いところだなと自分も思っているので。

○無藤氏　この本でどのくらい美術の話を入れたか覚えていないんですけど、ちょっとはあるかもしれませんね。いろんな方面を知っていて、雑学豊富ということを奨励したいわけではないです。でも、常に面白がって興味を持っているほうがいいとは思うんですけどね。

ついこの間、誰と話したんだったかな、大阪に行くと幼稚園の子どもちゃんと話の落ちをつけるよね（笑声）。うまいよな。育ちが違くと誰か言うておりましたよ。そうなのかもしれないね。

話の落ちをつけるというのが重大かどうかよく知りませんが、大阪の文化の一つかもしれないし、話にユーモアを持つとか、社交性としては大事かもしれない。でも、私は東京育ちだから、時々面倒くさいですけどね（笑声）。落ちをつけるやつ、人の話に一々

「えっ、ほいで？」とかいう、明石家さんまじゃねえだろうって思いますけど（笑声）。

それは置いておいて、つまり、様々な面が大事だというのは、別に浅くていいんですよ。深く知る必要はないんですけど。どうしてかといえば、基本的に幼児期に全ての芽生えがあると私は思うわけです。それが、この数十年の幼児教育のかなり大きな捉え方の変化の一つであります。何でもある、元は。芽生え、数学もある、科学もある。ある程度、保育内容として書いてあるけど、全部は直し切れないところもあるんですが、例えば、ソニー教育財団の「科学する心」、秋田さんを中心にやっていますよね。多分、関西でも~~本社~~応募していて、評価されていると思うんですが、秋田さんが始めた頃、幼児で科学する心とか、科学の芽生えとか、使う人はいましたけれども、余り多くはなかったと思うんです。でも、さっきのデューイの話じゃないけど、日常の実践の中に既に科学も芸術も起きているんです。それとプロフェッショナルなレベルとが連続しているんだと見ているわけですけど、そうだとすれば、幼児のやっていること、遊びなり何なりも、プラグマティストの言い方と言えば実践ですけど、その中にその芽生えはあるんです。

幼児だから、高級ではないというか、難しくはない。だけど、その根はあるということです。さっきの円の話でもそういう数学の根があるので、それは、10の姿で言うと数量だけの関心・感覚。感覚というのは、もっと詳しくそういう感じだよという話をしているんだけど、だから、当然、いろんなところに芽生えがある。そうすると、当然、アートというか美術にもその芽生えがあるよね。

じゃ、アートの芽生えというのが幼児期において何なのかが重大な問題で、今、日本の中でも世界的にも非常に活発な議論があるんです。要するに、型どおりの絵を描かせてもしょうがないだろう。これは多少アートに関心のある人は思うんだけど、じゃ、どういうものがいいのか。いいという言い方がそもそも問題かもしれないが、あるいは、レッジョ・エミリアなどを多少知っていれば、あそこにアートの絵がたくさんあるわけだけど、そういうものは、大人が見ても美しいと感じるところがあるけれども、それがポイントなのかなということです。

これについてはまだそんなに詳しく論じていないんですけど、やっぱり美の問題の議論というのは、ここ数十年、活発は活発なんですけど、問題が哲学的だから正解がこれとは出てきませんけれども、それを幼児に即して考えることは哲学者がするわけではないので、それを考えるのは我々です。我々というのは保育研究者です。保育研究者以外、そんなことをやってくれないから。2歳児にとっての美とは何かなんてこと、哲学者が真面目に考える

ようなことはしないですよ。

でも、考えるわけですよ。そうすると、ある園で、そんなに珍しくないけど、大きな紙を用意して、子どもたちがポスターカラーみたいな色づけで手につけてべたべたと押し色遊びをする。あるいは、美の始まりなどは、どういう意味で美の始まりなのかとかね。

最近、私は、悩みながら、考えながら結論は出ないんだけど、あるところに行ったら、そういうことを一生懸命やっているところ、1歳児の塗った、べたべたして色を塗ったかなり大きな紙が園長室の前、廊下に大きく貼ってある。赤い色があれこれと大きく紙面を占めていて、「あぁいいね」という感じなんだけど、よく考えたら、これを1歳児が見て感動するのかな。私たちが感動しているのは、1歳児の美的活動に感動しているのか。そうじゃなくて、たまたまつくったものに1歳児とは無関係に感動しているのか。だって、1歳児が作品意識を持ってつくっているわけじゃないじゃないですか。絵の具遊びをしているだけです。と考え出したら分かんなくなっちゃって、そういうすてきな絵をすてきだなと思うだけで保育としていいのかというのが分からない。本当に分からないんですよ。ずっと考えているんだけど分からない。でも、何かそこら辺に手がかりを見出したい。

一つは、ちょっとしたところでの、それをある意味でしみじみ眺めたときのある種の小さな感動は、ゼロ歳は自信がないけど、1歳半ば過ぎくらいからはあるのかなということです。じっと眺めていた。

今、ペットボトルがあるんですけど、これ、揺らしてやると、中が波立って、光のぐあいでもちょっときれいなんです。これをこうして、1歳半ばくらいの子がしばらく見たりするんですけど、見ていると「おおっ」という感じの美的感動と呼んでいいかどうか、ちょっと自信はないんですが。

もう少しちゃんとした例を挙げる。東京に雪の降った日、1歳児クラス、ゼロ歳児クラスかな。年齢としては2月だから1歳くらい、小っちゃい子が部屋にいたんだけど、雪が降って、やんでいます。それで、小さな庭が雪一面、白なんだけど、そこに出てきたんです。それを動画を見たんだけど、出てきて、それで東京の子だから、雪を初めてみたわけです。

雪って、東京だと毎年降るとは限らない。降っても積もらない。そのときはきれいに積もったんです。触るでしょう。冷たいじゃない。でも、雪という概念がないもんだから、昨日までは茶色と草があったりして、白い。本当に訳が分からないという感じですよ。茫然としていましたけれども、触って、つかんで、「何？なあに？」という感じで。溶け

できますよね。ちょっと表情が緩むんだけど、それは美的感動というか、美的驚きというか分かんない。美って言っちゃうと言い過ぎだけど、少し大げさな言い方をすると、この世界のすごさを知った経験みたいな感じなんだけど、そういう一瞬の美ってあるなというふうに最近考えていて、私だけが考えているわけじゃなくて、そういうことを言う人がいて、そういうものといわゆるアート作品との距離は長いんだけど、1歳代から始まって、割と作品ぽくなってきます。作品意識というのが4歳くらいから出てくると思うんです。飾ってあげると、ちゃんと自分のものとして見るようになって感心するとか。その辺の大きな流れを考えるみたいなことなので、例えば、そういうぐあいにアートセンスを養うとか、育つというのは大事だよと最近考えている。私だけではないんだけど、考えていて、その辺りから、具体的には要領・指針の保育内容の表現を考え直さなきゃいけないだろうと思っています。

皆さんの資料の中で、本文の3ページ、大きな括弧の「保育の実践や思想」という中に番号が振られています5)「無藤先生から、教育保育の行政に携わっている方々や小児科の先生方に」という文章が下のほうにありますけれども、その中に、真ん中辺に私の答えがあります。幼児教育の使命は広がったこと。多種多様な力や姿勢を養う。例えば、リテラシーや科学の芽生えや運動能力や思考力、さらに協同性、創造性、クリエイティビティ、想像性、イマジネーション、民主主義的態度、美的センス等々の芽生えが育つんですよということが、かなり実践的にもはっきりしてきたことと、研究としてもだんだん、世界的にですけど、検討が広がりつつあります。

その中の一部は小学校で取り上げています。でも、取り上げられないものも多いんですけど、幼児期というのは、そういう本当に人生の基盤にして様々なものが育っていく場ということを保育者たちは十分考えながら、芽生えだから、どれも十分育つことじゃないんだけど、ある程度芽生えとして育っていくことがあることを意識していくことが大事かなと考えています。

○司会者 名残惜しいんですけども、時間の都合もありまして、ちょっと縮めていただくような形になります。

○北野氏 先生、もうあと1分になってしまいました。

でも、最後に先生がおっしゃられたことを、もし時間があるなら私もしゃべりたいと思っていました。やっぱり全ての芽生えの部分が保育の中にあり、もはや保育の重要性というものは、これ以上過小評価されたくないし、そういう意味では、私たち保育の専門職や

保育研究者や保育実践者が一緒に、この分野が大きな大きな「愛と知の循環」の中で子どもたちの保障すべき大事な全ての芽生えがあるもので、ここの重要性は決して小学校以降の前倒しとか、準備教育の問題じゃないんだということをもう一度自覚したいし、そして、今、次の指針や要領の会議が始まっていますが、遊びは学びだということをしかり、先生の本の中にももちろん何度も書いてありますけれども、そのところを大事にしていくこと。先生の本から学んで、私たちが保育の重要性や独自性を自分たちの言葉で説明できるようにっていかなくやなと思いました。

ばっちり時間になったと思います（笑声）。先生、どうもありがとうございました（拍手）。

○司会者 最後の時間調整まで、ありがとうございます。

最後に、無藤先生、一言、何かメッセージをお願いいたします。

○無藤氏 最後に出たように、幼児たちは豊かに用意された環境の中で、本当にいろんな芽生えが見出されていると思うんです。それを保育者がどう拾うか。そして、ほかのところとどうつないでいくか。さらに、子どもたち同士の中で、それらを言葉にしていくことでよりはっきりさせていく。それらを通して、遊びを通しての学びということが実現すると思うんです。その始まりとしては多種多様であるというところ。

学びというと、小学校の教科の幾つかにつなぐことだけに見えやすいし——つなぐことは大事なんです。でも、それ以外にもいろんなところがあるし、いろんなことがあることが、かえって小学校の教科を豊かにしていくところがあるわけです。

例えば、図画工作に粘土が出てくる。幼児期に粘土をやっているから、つながりをやったら極めて直結していますけど、今言ったような美的センスの育ちの中で小学校の図工の粘土の時間があることで何が変わるかというところにいけば、もっと小学校教育が豊かになるんじゃないかと思いました。

○司会者 ありがとうございました。

もう一度最後に北野先生、無藤先生に拍手をお願いいたします。

（満場拍手）

では、皆さん、本日はありがとうございました（拍手）。

——了——